

歴史バラッド「フレンドロート炎上」について

井 上 清 子

A Study on "The Fire of Frendraught"

Inoue Kiyoko

「フレンドロート（フレンドラフト）炎上（"The Fire of Frendraught"）」は、イングランド並びにスコットランドの伝承のバラッドを集大成したハーヴァード大学のチャイルド（Francis James Child）が、第196番目に採録したバラッドである。それは、17世紀前半にスコットランド北東部のアバディンシア（Aberdeenshire）で実際に発生した火災を扱っており、分類上は歴史（的）バラッド（historical ballad）に属する。

バラッド自体は、事件の核心部にある種扇情的に歌っているに過ぎないが、事件の背後には、国王統治権と地方豪族支配権、法による解決と力による解決、プロテスタント信仰とカトリック信仰といった、当時のスコットランドが直面し、正にそれらの一方を選択しつつあった問題の総てが潜んでいたと考えられる。また、民衆に対してニュース報道紙として機能したそのバラッドの、情報提供の在り方は、今日のマス・メディアのそれに通じるものがあるように思われる。

The Fire of Frendraught*

The eighteenth of October,
A dismal tale to hear,
How good Lord John and Rothiemay
Was both burnt in the fire.

When steeds was saddled and well bridled
And ready for to ride,
Then out it came her false Frendraught,
Inviting them to bide.

Said, "Stay this night untill we sup,
The morn untill we dine;
'T will be a token of good 'greement
'Twixt your good Lord and mine."

"We'll turn again," said good Lord John;
"But no," said Rothiemay,
"My steed's trapan'd, my bridle's broken,
I fear the day I'm fey."

When mass was sung, and bells was rung,
And all men bound for bed,
Then good Lord John and Rothiemay
In one chamber was laid.

They had not long cast off their cloaths,
And were but now asleep,
When the weary smoke began to rise,
Likewise the scorching heat.

"O waken, waken, Rothiemay,
O waken, brother dear,
And turn you to our Saviour,
There is strong treason here."

When they were dressed in their cloaths,
And ready for to boun;
The doors and windows was all secur'd
The roof tree burning down.

He did him to the wire-window,
As fast as we could gang;
Says, "Wae to the hands put in the stancheons,
For out we'll never win."

When he stood at the wire-window,
Most doleful to be seen,
He did espy her, Lady Frendraught,
Who stood upon the green.

Cried, "Mercy, mercy, Lady Frendraught,
Will ye not sink with sin?
For first your husband killed my father,
And now you burn his son."

O then out spoke her, Lady Frendraught,
And loudly did she cry;
"It were great pity for good Lord John,
But none for Rothiemay.
But the keys are casten in the deep draw well,
Ye cannot get away."

While he stood in this dreadful plight,
Most piteous to be seen,
There called out his servant Gordon,
As he had frantic been.

"O loup, O loup, my dear master,
O loup and come to me;
I'll catch you in my arms two,
One foot I will not flee.

"O loup, O loup, my dear master,
O loup and come away,
I'll catch you in my arms two,
But Rothiemay may lie."

"The fish shall never swim in the flood,
Nor corn grow through the clay,

Nor the fiercest fire that ever was kindled
Twin me and Rothiemay.

"But I cannot loup, I cannot come,
I cannot win to thee;
My head's fast in the wire window,
My feet burning from me.

"My eyes are seething in my head,
My flesh roasting also,
My bowels are boiling with my blood,
Is not that a woeful woe?

"Take here the rings from my white fingers,
That are so long and small,
And give them to my Lady fair,
Where she sits in her hall.

"So I cannot loup, I cannot come,
I cannot loup to thee;
My earthly part is all consumed,
My spirit but speaks to thee."

Wringing her hands, tearing her hair,
His Lady she was seen,
And thus addressed his servant Gordon,
Where he stood on the green.

"O wae be to you, George Gordon,
An ill death may you die,
So safe and sound as you stand there,
And my Lord bereaved from me."

"I bad him loup, I bad him come,
I bad him loup to me,
I'd catch him in my arms two,
A foot I should not flee.

"He threw me the rings from his white fingers
Which were so long and small,
To give to you, his Lady fair,
Where you sat in your hall."

Sophia Hay, Sophia Hay,

O bonny Sophia was her name;
Her waiting maid put on her cloaths,
But I wat she tore them off again.

And aft she cried, "Ohon! alas, alas,
A sair heart's ill to win;
I wan a sair heart when I married him,
And the day it's well return'd again."

フレンドロート炎上

十月十八日の
聞くも恐ろしい物語
ジョン卿とロシメイが二人して
如何に炎に焼かれたか

馬に鞍置き手綱もかけて
いざ出立という時に
フレンドロートの奥方が
心偽り引き留める

「今宵はここにお泊まりを
食事もどうかご一緒に
友情の証しとなるように
卿の父上と我が殿の」

「日を改めて」とジョン卿は答えたが
「否」とロシメイが打ち消した
「我が馬は荒れ 手綱も切れた
今宵死ぬのが定めかも」

聖餐の歌と鐘の音に
人は皆寝床へと
ジョン卿とロシメイも
ひとつの部屋に横たわる

衣を脱いで程もなく
二人が眠りに落ちた時
俄に煙が立ち籠めて
身が焦げるように熱くなる

「ロシメイよ 目を醒ませ
目を醒ませ ロシメイよ

神に救いを求めねば
手ひどい裏切りに会うたゆえ」

二人が衣を身に付けて
部屋を飛び出んとした時に
戸も窓も堅く閉ざされ開かずに
梁が上から焼け落ちた

ロシメイは 鉄格子のある窓辺へと
必死の速さで駆け寄って
「格子を嵌めた人に呪いあれ
堅くて外には出られない」

格子窓の傍らに 哀れ立ち尽くす
ロシメイの目に見えたのは
外の芝生に立っている
フレンドロートの奥方のその姿

「奥様 願わくは慈悲の手を
それとも罪に堕ちたいか
フレンドロートは父上を殺し
汝がその子を焼き殺す」

その時口を開いた奥方が
声も高く叫ぶには
「ジョン卿には心から同情を
でも汝には微塵にも
鍵は釣瓶井戸に投げ込んだ
外に出ることは出来ませぬ」

ジョン卿は この恐るべき有様に
痛ましくも呆然と
その時従者のゴードンが
下から狂わんばかりに叫ぶには

「ジョン卿よ 飛び下りて
私目がけて飛び下りて
両手でしかと受けるゆえ
我が片足は動かぬが

「ジョン卿よ 飛び下りて
どうか飛び下りて逃げるよう
両手でしかと受けるゆえ
たとえロシメイは果てるとも」

「魚が水に泳がずに
 麦が土に育たずに
 そんなことがあろうとも 炎の中で
 ロシメイと離れることなど出来はせぬ

「飛び下りることなど不可能で
 汝の許には行けぬもの
 頭は格子に叩えるし
 足は炎で焼けていく

「目は煤まみれ
 肉は焦げ
 腸は血で茹で上がる
 我が身ながらも痛ましい

「白くて長いこの指の 指輪を抜いて投
 げるゆえ
 それをしかと受け止めて
 奥様の手に渡すよう
 広間に座る我が妻に

「飛び下りることなど不可能で
 汝の許には行けぬもの
 この身は既に燃え尽きて
 今 魂が話すだけ」

ジョン卿の奥方は
 両手を絞り 髪掻き毟り
 芝生に立ち尽くすゴードンに
 従者のゴードンに言うことは

「ジョージ・ゴードン 汝に呪いあれ
 不舎の死を逃げるよう
 汝は無事安穩とそこに立ち
 私は卿に先立たれ」

「卿に繰り返し叫んだは
 飛び下りて 私目がけて飛び下りて
 両手でしかと受けるゆえ
 我が片足は動かぬが

「卿は白くて長いその指の
 指輪を抜いて投げ落とし
 奥様の手に渡すよう

広間に座る奥様に」

ソフィア・ヘイ ソフィア・ヘイ
 麗しのソフィアこそ その名前
 侍女が着せかけた衣をば
 奥方はまた引き裂いて

何度も嘆き悲しむに
 「心の痛みがまたここに
 卿に嫁いだその時の
 心の痛みが再び戻って来ようとは」

I

フレンドロートの火災は、1630年10月8日真夜中から翌日未明にかけて、スコットランド北東部アバディンシアのフォーク教区（parish of Forgue）—現在のハントリー（Huntly）の町から11マイル東北東に位置する—で発生した¹。フレンドロート領主ジェイムズ・クライトン（James Crichton, Laird of Frendraught, 以下フレンドロートと略記）の領主館の一部である四階建ての古い塔が全焼し、同夜宿泊していたメルガム子爵ジョン（John, Viscount Melgum）とロシメイの領主ジョン・ゴードン（John Gordon of Rothiemay, 以下ロシメイと略記）を含む計6名がそこから脱出できず、炎に巻かれて焼死した。

メルガム子爵は、スコットランド王家に次ぐ四大家（豪族）のひとつで、「北部の雄（Cock o' the North）」と称される第一代ハントリー侯爵ジョージ・ゴードン（George Gordon, Marquis of Huntly）の次男（五男とする説もある）で、当時24歳もしくは25歳になっており、妻であるエロル伯爵フランシス（Francis, Earl of Errol）の娘のソフィア・ヘイ（Lady Sophia Hay）との間に一子があつた。ロシメイは、ハントリー侯爵の親族で臣下（vassal）の地位にあり、最近死亡した父親のウィリアム・ゴードン（William Gordon）の跡を継いだばかりで未婚であつた。古い塔が全焼し、高貴の青年を含む6名もの焼死者が出たその火災は、当時の人々に大きな衝撃を与えたが、同時

にそれは、事前に起きた2つの関連する事件の故に、人々の間に色々な疑惑と憶測を招いた²。

1629年当時、フレンドロートの領地は、バンフシア（Banffshire）にあるロシメイのウィリアム・ゴードンの領地と、デヴェロン川（the Deveron）を挟んで隣接していた。両家はそれまで友好的な関係を保って来たが、ウィリアムがフレンドロートに売却した土地に付属する鮭の漁業権（salmond-fishing）を巡って両家の間に激しい争いが生じた。

フレンドロートは争いを法廷に持ち込み、勝訴となった。しかしウィリアムが判決に従うことを拒否したため、彼は当時の慣習に従い、法廷にウィリアムを、「法外者・法益剥奪者（outlawed）」と宣告するよう求め、この請求も聞き入れられた。この時点に至り、それまでのフレンドロートのひたすら法に訴える姿勢を、自分に対する大きな侮辱であると考えていたウィリアムは、高地地方（Highlands）の山賊ともいえる人々（loose and idle men; broken men）を集め、フレンドロートの領地を荒らし牛を略奪する行動に出た。ゴードン一族の座右銘（motto）は「勇敢に戦いぬくこと（to birstle yont）」であり、血は水より濃いという道理から、ウィリアムには、いざとなれば一族の長である強大なハントリー侯爵が、あらゆる助力を惜しまぬであろうとの確信があったと思われる³。

フレンドロートは、耐え得る限りウィリアムの行動するに任せていたが、やがて報復の手段を取るべき時が来たと考えた。彼は、枢密院（[Lords of] the Council）に願い出て、ウィリアム（と彼に従う者）を逮捕することを命じる委任状（commission）を得ることにしたのである⁴。

1630年1月1日、フレンドロートは委任状を執行すべく、伯父のジョージ・ゴードン、ピトケイプルの領主ジョン・レスリー（John Leslie, Laird of Pitcaple）の次男ジェイムズ、ジェイムズの伯母の夫であるリードヒルのジョン・メルドラム（John Meldrum of Reidhill）などを含む一団と共にウィリアムの住居に向かった。しかし、ウィリアムは彼が来ることを事前に知り、配下を武装させてこれを迎え撃つたため、

争いとなり、フレンドロート側ではジョージ・ゴードンが重傷を負って死亡し、ウィリアム自身も重傷を負い、数日後に死亡した。またメルドラムも重傷を負った。

明らかにフレンドロート側が正当防衛にあたり、しかるにウィリアムの息子ロシメイ（＝ジョン）が、父親の仇を討つべく、援軍として当時最も悪名の高い山賊の頭目の一人であったキャロンのジェイムズ・グラント（James Grant of Carron）を金で雇い入れ、フレンドロートの領地の焼き打ちや略奪を行わせようとしていたため、枢密院が介入し、数名の貴族に委任状を与えて両者の和解にあたらせた。更に枢密院は、仲裁がうまくいかない場合には、ハントリー侯爵の判断を仰ぐようにとの指示を添えた。

委任状を受けた人々は、一方でロシメイの許に結集し始めたグラントの一派を押さえつつ、一方で侯爵の仲裁を求めた。事件に関して、最終的に侯爵は、「フレンドロートは総て法の範囲内で行動しているが、ウィリアム殺害と、その件により後継者が被った苦痛を和らげるため、然るべき金（a certane summ of money）を支払うこと。また、これも殺害されたジョージの遺児のため幾何かの金を支払うこと」とする案を示し、それは慣習に従って「仲裁宣告（decreit-arbitrall）」の形で文書化された。幸いにも侯爵の仲裁が実を結び、双方が和解に応じた。そしてフレンドロートからは、当該の賠償金が支払われた。

争いが決着するや否や、同じ根からもうひとつの争いが生じた。リードヒルのジョン・メルドラムは、1月1日の争いの際フレンドロート側に加わり重傷を負ったが、自らの働きに対する報酬を何度もフレンドロートに要求していた。しかしフレンドロートが、メルドラムの期待していたほどには金銭を与えなかったため、両者は口論となり、メルドラムは脅迫めいた言葉で更に報酬を求めた⁵。フレンドロートは再度支払いを拒み、故に腹を立てたメルドラムは、ある夜、フレンドロート所有の馬のうち最も高価なもの2頭を盗み去った。フレンドロートは、即メルドラムを窃盗罪（thift）で告訴し、ためにメルドラムは法廷に召喚された。しかし彼

は命令に従わず、出廷を拒んだ。

フレンドロートは、枢密院からメルドラム逮捕の委任状を受け、9月27日、彼が潜んでいると思われるピトケイブルに向かった。ピトケイブルは、メルドラムの義兄にあたるジョン・レスリーの所領である。そこにメルドラムは発見されなかったが、ジョンの次男ジェイムズが居合わせ—彼も1月1日の事件ではフレンドロート側に加わっていた—ジェイムズの伯父にあたるメルドラムの行為について話し合いが持たれた。

話し合いの中で、若いジェイムズは次第に激昂したが、フレンドロートは、彼もまた先回の事件では自分に加担してくれたことを考え、抑制的な態度に終始したようである。しかしフレンドロートの親族で彼に同行して来たコンランドのロバート・クライトン (Robert Crichton of Conland) は、ジェイムズと激しく口論し、言葉のやり取りから殴り合いとなり、銃でジェイムズの腕を撃って負傷させた。その傷が、何日も生死の境を彷徨うような重傷となったことも原因して、争いは拡大し、レスリー一族が一丸となってフレンドロートに報復せんとする事態が生じた。

生命の危険を感じたフレンドロートは、10月5日、武装の上ハントリー侯爵の許に赴き、保護を求めた。侯爵は彼を暖かく迎え、居城に滞在するよう勧めたが、その間にフレンドロートの居場所を突き止めたジョン・レスリーが、10月7日になって、約30名の武装した配下と共に侯爵の許を訪れた。侯爵は、フレンドロートが滞在していることを隠し、ジョンにフレンドロートと和解するよう求めたが、息子の負傷に激怒しているジョンには通じなかった。ジョンが立ち去った後、フレンドロートは帰宅する旨申し出たが、ジョンとその一党が途中で待ち伏せしているとの報もあり、侯爵は、もう一泊するようフレンドロートを引き留めた。

翌10月8日の朝、侯爵は次男のメルガム子爵に、何名かの従者と共にフレンドロートを護衛し、無事領主館に送り届けるよう命じた。ロシメイが、たまたま侯爵の許に居合わせ、一行に同行することになった。子爵一行は、途中レスリー一族の待ち伏せにも会わずにフレンドロート

を送り届け、帰路につこうとした。しかし、フレンドロートとその夫人 (Lady Frendraught)、特に夫人が、一行に一泊していくよう熱心に勧めた。北部地方において、客人への、物惜しみのない、限りなく暖かいもてなし (North-country hospitality) は、今日に至るまで大きな美德とされているものである。そしてその中心となるのは、一家の女主人であった⁶。

一行は、心のこもった十分な酒食の供応を受けた後、寝室に案内された。フレンドロートの屋敷は争乱の時代に建てられ、頑丈な造りで壁も厚く—10フィート位の厚さがあったと言われているが、部屋数は少なく全体に質素であった。一行が宿泊したのは四階建ての古い塔で、各階が一部屋ずつという構造になっていた。一番下の階は、どっしりとした石造りで丸天井になっており、その中央部に丸い穴があって梯子段で上階に行けたが、家人に使用されておらず、一家の食料その他の貯蔵庫になっていたようである。上階の各部屋は、総て石壁に羽目板が打ち付けてあり、また何本もの梁がわたされていた。一方、狭い窓には、頑丈な鉄の縦仕切り棒 (stanchion) が嵌め込まれていた。

子爵は二階に泊められたが、その部屋は普段フレンドロートの寝室になっており、一階の丸天井の開口部の真上に寝台が置かれていた。そして扉で、家族用の大きな食堂のある建物に通じていた。当時の習慣に従い、子爵の小姓 (page) であるイングリッシュ・ウィル (English Will) と従者の一人ロバート・ゴードンが、子爵の傍らで眠った。その上の階でロシメイと彼の従者2名、最上階でノスのジョージ・チャーマーズ (George Chalmers of Noth) という人物と、フレンドロートの友人であるロロック船長 (Captain Rollock)—彼らはその日偶然領主館に居合わせたようである—そして子爵のこれも従者の一人であるジョージ・ゴードンが眠った。

全員が眠りに落ちた真夜中過ぎに、突然塔に激しい火の手が上がり、一瞬のうちに塔全体が炎に包まれた。子爵とイングリッシュ・ウィル、ロシメイとその従者2名、そしてジョージ・ゴードンが焼死し、他の者は難を逃れた。子爵は、すぐに脱出すれば、恐らくは生き延びることも

可能であったと思われるが、友人であるロシメイを起こすべく上階に駆け上がった後に、階下に通じる梯子段が焼け落ち、不運にもロシメイと共に炎に焼かれたとされている。領主館の庭園には、フレンドロート夫妻と従者達が立ち、鉄の仕切り棒のため窓からの脱出もならず、必死に助けを求める人々の阿鼻叫喚の様子を、何を為すでもなく、ひたすら傍観し続けていた。

II

フレンドロートの火災は、17世紀前半のスコットランド北東部において、比較的大きな事件のひとつであったと思われる。その情報は、幾つもの方法で人々に伝えられたであろうが、文字を読むことのできぬ階層を主な対象にして、バラッドが作られ、旋律に合わせて歌われた。恐らくは社会の関心を引く事件であった故、当時多くの版 (version) が流布していたと考えられるが、現存するものは存外に少ない。前掲のチャイルドは、A-Eまで5版を採録しているが、うち2版は、各々1連 (stanza) 及び5連の、断片的なものである。

後代にアバディンシアで広範なバラッド収集を行ったグレッグ (Gavin Greig) によって、口承から2版が記録されたが⁷、これも1版は、2連のみの断片的なものに終わっている。また、残る1版も、詞句が相当欠落している連 (第8-10連、第12連、第19-21連) が見られる。併せて、当該のバラッドの改作である「フレネットの館 ("Frennet Hall")」 (全14連) が⁸、18世紀後半から1820年代にかけて、スコットランドで出版された5冊のバラッド集や歌集に掲載されている⁹。

今、グレッグの収集した2版をF及びGと仮称すると、現存する7版の概略は次の通りである。

- Aa. "The Fire of Frenndraught" (全26連)
— マザーウェル (William Motherwell) の (編集した) バラッド集 (*Minstrelsy: Ancient and Modern*, Glasgow, 1827) に掲載された版。エディンバラ在住のシャープ (C. K. Sharpe) からマザー

ウェルに送付された。

- Ab. "Burning of Frenndraught" (全26連)
— メイドメント (James Maidment) のバラッド集 (*A North Country Garland*, Edinburgh, 1824) に掲載。エディンバラの書籍出版業者ウェブスター (David Webster) によって提供された版。
- B. "The Burning of Frenndraught" (全16連)
— キンロッチ (George R. Kinloch) の稿本 (Kinloch MSS, 1826 and after) の第5巻に記録されている版。
- C. "The Fire of Frenndraught" (全23連)
— ロバートソンのノート (a notebook of Dr Joseph Robertson) に記録されており、1832年10月11日フォーク教区においてスコット (A. Scott) により収集された。
- D. (タイトル無し) (全5連) — リトソン (Joseph Ritson) のバラッド集 (*Scotish Songs*, 2 vols., London, 1794) に掲載されており、ボイド師 (Rev. Mr Boyd) が自らの記憶を辿って筆記し、リトソンに送付した版。
- E. (タイトル無し) (全1連) — キンロッチの稿本の第6巻に記録されている版。
- F. "The Fire o' Frenndraught" (全22連)
— エロン (Elion) 在住のクーツ夫人 (Mrs Coutts) の吟唱 (recitation; singing) を採録したもの。併せて旋律も採譜された。
- G. "Fause Frenndraught" (全1連) — ミルブレックス (Millbrex) 在住のレティー夫人 (Mrs Rettie) の吟唱を採録。併せて旋律も採譜。

Aの版のaとbは、本来同一のものであり、アバディンシアのストリッケン (Strichen) 在住のジェームズ・ニコル (James Nicol) によって記録された⁹。ニコルは、若い頃近隣の老人達が歌っていたバラッドを多数記憶しており、後年それらを筆記して、バラッドの愛好家や収集家、編集者などに送るようになった。従って当該の版は、本来の口承のものが即記録さ

れたのではない。加えてニコルは、数年間アメリカで生活したこともあり、革新的な考えの持主として、自らも政治や宗教関係のパンフレット類を執筆・出版するなど、バラッドを伝承してきた階層の人々とは少し隔たりがあると思われる。

故にその版は、ニコルが記憶を頼りに詞句を記録した時点で、多少の修正が加えられている可能性があるが、シャープやウェブスターといった仲介者を経て—シャープはウェブスターからその版を入手している—マザーウェルとメイドメントの手にわたり、個々に僅かではあるが編集が施された。ニコルのその版は、バッハン (Peter Buchan) のバラッド集 (*Gleanings of Scotch, English, and Irish scarce old Ballads*, Peterhead, 1825) にも掲載されており、三者の中では、(シャープがその版に手を加えていなければ) メイドメントとバッハンの方がマザーウェルより忠実に、ニコルの版を掲載したようである。

因にニコルの版は、基本的には他の版と、物語の展開や表現において一致している。彼が自らの記憶を基に、それらの版から幾分かを借用したり、後代の、事件全体の経緯を知り得る立場にある者として、更に、多少とも文学的素養のある者として、部分的に加筆もしくは修正を加えた可能性はあるが、本来的にそれは、スコットランド北東部で伝承されていた版のひとつであると言える。

断片的な版であるD・E・Gを除いて、A・B・C・F各版にはほぼ共通して語られている内容は次の通りである。

「10月にフレンドロートの領主館が炎上し、哀れにもジョン卿 (メルガム子爵) とロシメイが焼き殺された。二人は、従者と共にフレンドロートの屋敷を訪れた際に、ハントリー侯爵 (家) とフレンドロート (家) の和睦を願うフレンドロート夫人に強く引き留められ、同家に一泊することになったものである。

夜の祈りのための鐘が鳴らされ聖餐が行われた後、ジョン卿とロシメイは同室で眠りについた。深夜火災が発生し、二人は炎から逃れようとしたが、部屋には (外から) 鍵がかけられており、窓には金網が張られ、更に縦の仕切り棒

が嵌められていた。

眼下にフレンドロート夫人が見えたので、二人は必死に彼女に助けを求めたが、夫人はただ歩いているだけである。ジョン卿とロシメイの従者達が庭で、二人に向かって飛び下りるようにと声を限りに叫んでいる。しかし、二人が窓から脱出することは不可能であった。

ジョン卿は指輪を抜き、窓の仕切り棒の間から投げ落として、それを妻に届けてくれるよう言い遣す。」

他に、4版にほぼ共通しているのは、ジョン卿とロシメイの寝室の鍵が、二度と開けられぬよう深い釣瓶井戸 (draw well) に投げ込まれたか (A・C・F)¹⁰、(階下に通じる) 床の開口部に投げ込まれたと (B) されている点である。

個々の版の特徴として、Aの版では、ロシメイが下にいるフレンドロート夫人に向かって、「汝の夫は我が父を殺し、今、汝がその息子を焼き殺すのか」と叫び、対して夫人は、「ジョン卿は痛ましくも哀れであるが、汝には微塵の同情も持たぬ」と言い返している。そして、夫を失ったソフィア・ヘイが、生き延びて指輪を届けに来た従者を激しく詰り、悲しみに打ち拉げられる様子が、最後の6連で語られる。ただ、ソフィア・ヘイに関する連は、このバラッドの他のどの版にも見られず、伝承の過程において、他のバラッドと混交した可能性もあることが指摘されている¹¹。

Bの版では、フレンドロート夫人が帰宅しようとするジョン卿に、一泊するよう執拗なまでに強く勧めている—彼女は、願いが聞き入れられるなら自領の一部を贈るとまで申し出る。そして、断りきれずに一泊して炎に巻かれたジョン卿は、死に臨んで自分の小さな詩篇集 (psalm-book) を取り出し、3編を歌って、各編の最後に「神よ、我らが苦しみを終わらせ給え」と祈る¹²。また最後に彼は、自らが「翼を持ち、燕のように速く飛べるのであれば、不実な (fause) フレンドロートの許に飛んで行き、自分が死ぬまで、復讐 (vengeance) を (してやる) と叫び続けられるものを」と述べている。

Cの版では、ジョン卿は炎に焼かれながら、

窓から指輪と共に金貨の入った財布 (purse o the gude red gowd) を投げ落とし、下にいる従者に「金貨は貧しい人々に分け与えよ」と指示する。そして妻には遺言として、「寝床は、これまでの丈でよいが、(横で眠る筈の夫はもうこの世にいない故) 幅広くは整えぬよう」伝えてほしいと頼む。また、彼は死に臨んでロシメイに、「二人で主を称え、詩篇第53番 (the fiftieth psalm and three) を歌おう」と勧めている。

しかし、他の版に見られぬCの版の大きな特徴は、最後の6連である。火災の翌朝、ロシメイの母親 (Lady Rothiemay) がフレンドロートの許を訪れ、彼に向かって、「汝はゴードン一族を裏切り、我が夫を殺害し、更に我が息子を焼き殺した」と詰る。そして母親は、フレンドロートが「罪の故に破滅する」ことを願い、上掲のBの版と似た表現で、自分が死ぬまで、彼に「復讐を」と呼び続けることを誓う。また彼女は、「夫は未だしも戦いの中で殺され、埋葬されて地中に眠るが、ロシメイの後継者たる我が息子は…」と、焼死した息子の無念を語り、自分がここに来たのは総て息子が故であると述べている。

Fの版では、フレンドロート夫人が、炎の中のジョン卿とロシメイに向けて、(詞句が欠落している故断定し難いが、恐らくは) Aの版とは逆に、「ロシメイに対しては、(ジョン卿に対するより) 十倍もの心の痛みを感じる」と述べている。またジョン卿は妻に向けて、前掲のCの版に示したのと同じ言葉を遺すのに加えて、「息子を立派に育て上げ、フレンドロート家とその残忍な仕打ちに復讐させる」よう遺言する。そして(恐らくはジョン卿がフレンドロート夫人に向かって) 彼女の不幸な死を望み、自らも「もし小鳥であれば…」と、前述のBやCの版に示したのと似た表現で生涯の復讐を誓っている。

因に、当該のバラッドの改作である「フレネットの館」は、最後の1連を除いて、夫をジョン卿の父親 (ハントリー侯爵) に殺されたフレネット夫人 (Lady Frennet) が、復讐心に燃え甘言を用いて、通りかかったジョン卿とロシメイを引き留めるのに成功するまでを詳細に語

っている。そして最後の1連だけが、「二度と朝日がジョン卿とロシメイの上に射すことはなかった」と二人の死を暗示する。改作に際して、理由は不明であるが、フレンドロートがハントリー侯爵に殺害されたという設定になっており、また、元のバラッドの核心ともいえる火災には一切言及されていない。

AからFまでの各版に多少の異同はあるが、最終的に「フレンドロート炎上」が指摘しているのは、火災が偶発的なものでなく意図されたものであり、その首謀者はフレンドロート夫妻、とりわけ夫人であるという点である。

夫人は、ハントリー侯爵 (家) とフレンドロート (家) の和睦のためと称して、(フレンドロートを無事に家まで送り届けた言わば恩人の) メルガム子爵とロシメイの一行が帰ろうとするのを、強引なまでに強く引き留めている。そして、緊急の場合に脱出不能な部屋に彼らを宿泊させている。家中の者が眠り込んでいたと思われる深夜に、(母屋でなく恐らくはあまり火の気がなかったと思われる) 塔が、一瞬にして激しい炎に包まれている。(深夜で、しかも火の回りが極めて早かったにもかかわらず)、領主夫妻 (と家内の者) が、(誰一人負傷することもなく早々と) 庭に避難している。炎で焼かれながら、必死に助けを求める子爵やロシメイに、夫妻は何の救いの手を差し伸べるでもなく、(また従者に何を命じるでもなく、) ひたすら二人を傍観し、そして見殺しにしている。

III

焼死したメルガム子爵の父親であるハントリー侯爵は、深い悲しみと激しい怒りのうちに死者の埋葬を終えると、インヴァネス (Inverness) にいる長男のゴードン卿 (Lord Gordon) を居城に呼び、子爵の義兄にあたるエロル伯爵ウィリアムや友人達とも連絡をとった。更に彼は、一族の主だった者 (heads) を結集させた。一同は熱心に討議し、「火災が、偶然とか不注意、あるいは事故 (chance, sleuth or accident) によって発生したのではなく、フレンドロートが、かつてのウィリアム・ゴードンとの争い (feud) の復讐をすべく、罪もない息子のロシ

メイを殺すため、故意に (plottit and devysit of set purpois) 起こしたものである」との結論に達した。フレンドロート、フレンドロート夫人、彼らの友人や知人、あるいは夫妻の従者の誰かは、真実を知っているであろう。

侯爵は、犯人と思われる者との決着をつけるべく、直ちに行動を開始した。以前の侯爵であれば—そして今回、フレンドロートが早くも身の保全のために奔走しているという事実がなければ、即部下を率いてフレンドロートの許に赴き、力による制裁を加えたであろう。しかし、宮廷における彼の勢力も、先王ジェイムズVI世 (James VI, 即ちイギリス国王 James I) の時代とは違ってきていた¹³。

ジェイムズVI世は、スコットランド統治、特に高地地方統治のために、低地地方 (Lowlands) との境界周辺に君臨する豪族に助力と協力を求めることで、彼らを国王統治権の下に組み込む政策を取り、従って、侯爵の数々の傍若無人な行動を、それが、時には国王に背き、国王の身を危険に曝すものであっても、基本的には許してきた。また国王は個人的にも、侯爵を愛してやまぬ一面を持っていた。しかし現国王チャールズI世 (Charles I) は彼を好まず、その強大な勢力を削ぐことに腐心していた。1629年、即ち火災の発生する前年にも、侯爵は国王から、5千ポンドと引き換えに、アバディーンとインヴァネスの州長官職 (Sheriff Principal) を退くよう求められ、不本意ながらも従うことを余儀なくされたばかりであった。背後には、政敵モレイ伯爵 (Earl of Morey) の暗躍があった。

力による報復が成功すれば、望みは薄い、北東部の慣習として黙認される可能性もあった。しかし失敗に終れば、国王の怒りを買うのみならず、政治上・宗教上の敵の総てが侯爵に襲いかかってくるであろう。1576年に未成年で父親の跡を継いで以来、彼は、その強大な勢力を築き維持するために、これまで多くの敵と、時に策略を用い、時に武力によって戦ってきた。

また、1559年5月の、ノックス (John Knox) の激烈な説教と共に開始されたスコットランドの宗教改革によって、17世紀初頭までに大多数の人が新教に改宗する中、侯爵は公然とカトリ

ック教信仰を貫き続けた。そして親族や配下にも、多くのカトリック教徒を擁していた。彼は、時に国教に改宗すると宣誓することによって、聖職者の激しい攻撃から身を守ることもあったが、最終的には、ジェイムズVI世の政策が、カトリック教徒を弾圧するよりは、むしろ懐柔する方向であった故に、それに助けられてきた一面もあった。

侯爵は、身辺の人々と慎重に検討した結果、自らが行動に出て力による解決を図るのではなく、法に訴える道を選んだ。しかし火災の一件に関しては、侯爵よりもフレンドロートの行動の方が早かったと言える。フレンドロートは、火災から約3週間後の11月初め、当時パーズ (Perth) にいたスコットランド大法官 (Chancellor) の許に出頭して身柄を委ね、その保護を求めると共に、自らに不利な告訴であっても裁判を受ける旨申し出た。彼は、大法官からエディンバラの枢密院に赴くよう助言され、枢密院で同じ申し出を行っている。

1630年11月4日、枢密院は放火の容疑で、リードヒルのジョン・メルドラムと彼の従者3名 (William Murray, Robert Wilson, Robert Ridfurde) の逮捕を命じる旨の委任状を発行し、更に11月30日には、フレンドロート家の、従者筆頭であるジョン・トッシ (John Toshe) 並びに執事 (Thomas Jose)、庭師 (John Gib)、料理人 (Robert Bewile) を逮捕するための委任状を発行した。続けて12月23日には、枢密院は、フレンドロートの友人や従者計23名を逮捕するための委任状を発行し、併せて地域の聖職者全員と名士計17名に証言を行うよう命じた。

明けて1631年1月27日には、フレンドロート夫妻と同家の従者達を審理するための枢密院委員会 (committee of the Council) が作られ、委員が任命された。同委員会による審理の結果は公表されていないが、恐らく事件の核心に迫るような結果は得られなかったようである。2月1日に、フレンドロート夫人と侍女2名 (Magdalene Inneis, Christian Chalmers) に帰宅許可が出されているからである。またこの時点で、フレンドロートとその夫人が、ほぼ潔白であろうとの判断も下されたように思われ

る。

同じ時期に枢密院は、フレンドロートの火災の現場検証を行うための委員会を構成すべく、6名の委員に委任状を発行し、彼らは、4月13日に現場検証を行った。その一週間後に提出された委員会報告書によれば、「出火元は、塔の一階の丸天井の周辺であり、3箇所が特によく燃えている。火災が、偶然のものか何者かの手による故意のものか、委員会には判断不能であったが、塔が一瞬のうちに炎上していること、並びに諸々の状況を勘案し、(仮に故意のものであるとすれば)内部からの手引きなしには、何びとたりとも外部の者が火を放つことは不可能であろうとの結論に至った。」

その間、2月15日には、トッシと面識があり、姉がピトケイプルの元従者であったウッド(Margaret Wood)という若い女性が、更に7月5日には、かつてフレンドロート夫人に仕えていたマッキソン(Margaret M'Kesone)という女性が、いずれも事件に関係ありとの容疑で逮捕されている。しかし両者共一特にウッドは厳しい尋問を受け、更に拷問を加えられたにもかかわらず一罪状を否認し続けた。最終的にウッドは、火災に関しては無罪とされたが、尋問と拷問の際に、数々の詐称や偽証を行ったことに対して有罪の判決を受け、鞭で打たれながらエディンバラの市内を引き回しの上、国外追放となった。マッキソンは釈放されたと思われる。

枢密院が有効な結論を引き出せないままに、時間だけが経過した。フレンドロートの火災に関して、枢密院は、一年近く一步も前進していなかった。恐らくこの時点で、枢密院は事件から手を引きなかったであろう。しかし1632年6月、枢密院は活動を再開することを余儀なくされた。国王が介入したのである¹⁴。

国王は、6月5日枢密院に親書を与え、厳しい語調で「毎週一日をその事件の解明に費やすよう」命じた。また彼は、同日別の文書を発し、枢密院に対して、審理の進展がなければ、「ジョン・メルドラムを、過去の行為に鑑み、拷問にかけた上、審理を行うよう」命じた。

国王の命令の示唆するところは、枢密院が、犯人を割り出して裁判にかけ、刑を宣告すべき

時が来た—そのためにメルドラムを犠牲の山羊にせよ—ということであった。ハントリー侯爵も、フレンドロートも、そして民衆も、皆が犯人を求めている。侯爵は、息子の恨みを晴らしてその霊を慰めるために、フレンドロートは、無実を決定的なものにするために、民衆は、正義が然るべく行われるために。

しかし、それまでに枢密院は、審理を進める過程で殆どの容疑者を、証拠不十分として釈放してしまっており、国王の命令が出た時点では、僅かに2名が収監されているに過ぎなかった。ジョン・トッシとメルドラムである。

枢密院は、国王の命令にある種の光を見出したが、最初からメルドラムを裁くには支障が生じた。6月28日にフレンドロートが枢密院に文書で、メルドラムの審理に関し、それまでに行った証言以上には為すべきものがない旨伝えたからである。また彼は、7月17日枢密院に向け、訴訟代理人(弁護士)と共に、フレンドロートの火災と焼死した人々に関し、自分が無実であるとされているにもかかわらず(being declared free and innocent)、以来被った損害と出費について、侯爵とその後継者ゴードン卿を相手取り、損害賠償の訴訟を起こす意志があることを表明した。従って枢密院は、まずトッシの審理から着手することを決定した。

トッシは、フレンドロートの従者として、概ね彼と行動を共にしており、1630年10月7日、即ち火災の前日も、滞在中のハントリー侯爵の居城から、フレンドロートの命令によって、「翌日主人がメルガム子爵とロメシイの警護のもとに帰宅する」旨を夫人に知らせに戻っていた。従って、火災に関連する「何らかの重要な事実」を知る者として、それまで留置され続けていたものである。

1632年8月3日、トッシは、フレンドロートの塔に放火した容疑により、最高法院(Court of Justiciary)において裁判にかけられた。起訴状(dittay)は¹⁵、トッシが犯行に至るまでの行動を整然と述べており、裁判でもそれらに関する審理が行われた。しかし、犯行に関して最も重要と思われる「動機」については、起訴状は、「悪魔のような衝動に駆られて(upon quhat devilische instigatioun)」眠り込んでい

る同僚の許から塔の鍵を盗み出し、「悪魔のような自暴の気持で (out of ane devilische and disperat humour)」塔の丸天井の部屋に可燃物を大量に運び込み、それに火を放ったとすると留まり、裁判においてもそれが問われることはなかったと思われる。

トッシは、1631年4月1日及び1632年7月12日に、放火の容疑で拷問にかけられたが、一貫して無実を主張しており、それを根拠として、今回の起訴状に対しても、彼の弁護人から、即異議申し立てが行われた。そして、審理の結果それが認められている。枢密院は、新たな証拠・証人で再武装し、更なる審理に挑んだが、最終的に法廷はトッシを無罪とし、彼は1634年6月釈放された。

メルドラムの裁判は、1633年8月2日から2日間にわたって行われた。この間トッシはなおも拘留されていたが、彼の裁判は行われていない。

メルドラムに対する起訴状は¹⁶、トッシのそれに反して、放火は塔の外部から行われたと述べている。メルドラムが、悪名高い無法者 (ane notorious soirnar, outlaw, thief, and rebell) のジェイムズ・グラントと関係を持っていた事実が強調され—メルドラムと彼に金で雇われたグラントの一派が、1630年10月8日深夜12時から2時の間に、多量の火薬や可燃物を塔に運び、「丸天井の部屋の石壁の隙間から (threw the slits of stones)」それらを投げ込み、火を放ったものである。」

メルドラムは、一時期フレンドロートに仕えていたことがあり、家内の事情にも通じていたが¹⁷、トッシやフレンドロート家の従者と共謀した可能性の有無などは、起訴状に一切言及されていない。そして、トッシの起訴状では明確でなかった犯行の「動機」が、今回は「フレンドロートに対する深い憎悪の故 (ane deidlie haitrent, malice, and ilwill agains the said laird of Frendraucht)」と明記されている。

メルドラムの裁判に関しては、彼自身や多数の証人による宣誓証言書 (deposition) や調書を初めとして、検事側弁護人側双方が提出した膨大な関連文書が残されている。しかし中には、メルドラムの同席なしに枢密院で取られた宣誓証言書や、あくまで推測の域を出ないと思われ

る調書なども含まれ、ある時点で記録された証拠や証言が、次の時点では反転しているといった具合である。そして裁判は迷路に入り込むばかりであった¹⁸。

第一回裁判の後も、枢密院はもう一日をメルドラムの審理にあてたが、その間彼は容疑を否認し続けた。メルドラムの弁護人は、多くの起訴事項について、実際に証拠が提出され、証人が出廷するよう請求し、また事件当日メルドラムにはアリバイがあることを主張して¹⁹、最後まで争った。しかし、メルドラムの運命は決まっていたようである。陪審は彼を有罪と評決し、法廷は死刑の判決を下した。そして、メルドラムの領地と財産は、国王に帰属するものと定められた。

判決後、枢密院はメルドラムの許に数名の聖職者を赴かせ、彼から罪の告白 (confession of his guilt) を引き出そうとしたが、結果は明かされていない。

翌週メルドラムは、枢密院の助言を容れた死刑の方法に従い、エディンバラの市場十字架 (mercat croce) の許に引き出され、絞首台にかけて処刑された。その後死体は、頭部切断四等分の上、市内数箇所に晒された。

*

フレンドロートの火災は、発生から約3年後に、犯人の処刑をもって解決された。しかし、ハントリー侯爵を初めとするゴードン一族やスコットランドの人々の、フレンドロートとその夫人に対する怒りは—国王や枢密院の意に反して—収まることがなかった。

1633年頃から、フレンドロートの領地は、高地地方の無法者集団 (broken Hieland men) の襲撃を繰り返し受けることとなり、彼らは土地を荒らし羊などを略奪した。また領民たる借地人に暴行を加え、時にこれを殺害することさえあった。略奪者は、高地地方のあらゆる所から襲来したが、恐らくは侯爵の黙認がなければ、そのような遠征はある程度不可能と思われる。更に、夫と息子をフレンドロートに殺害されたと考えるロシメイの母親は²⁰、屋敷にそのような無法者が自由に出入りし、そこを根城と

するのを放置していた。

フレンドロートは、無法者が襲来するたびに、部下と共に勇敢に応戦したが、急速に彼の領地は荒れ、何人もの従者や領民が彼の許を去った。フレンドロートは火災の際にも、多くの財産や重要な文書・証文の類いを失ったとされるが、1634年10月、終に身の危険を感じ、単身エディンバラに赴いて枢密院に保護を求めた。

このような形の、ある意味での報復は、しかしながら侯爵に高い代償をもたらす結果となった。彼は、北部地方の統治を怠り治安の混乱を招いたとして、1635年1月、枢密院に出頭を命じられ、酷寒の中を老齢の身で首都に向かうことを余儀なくされた。以後、彼は同じ理由によって、5度を下らぬ枢密院命令に、時に出頭の上宣誓し、時に身柄を拘束されて保釈金を積んだ。そして、1636年6月13日、彼にとって最後となったエディンバラでの幽閉を解かれた侯爵は、病身を夫人に付き添われて故郷に向かったが、途中ダンディー（Dundee）から北に進むことができず、その町で死の床に伏した。彼は、ローマ・カトリック教徒であることを告白し、神にその身を委ねた。享年74歳であった。

その間フレンドロートは、自領が無法者集団の襲撃を受け続けることに對し、その加害者、即ちハントリー侯爵に向け損害賠償命令が出されるよう、何度も枢密院に嘆願している。最終的に、枢密院は仲介者を立て、侯爵にフレンドロートとの和解を勧告したが、調停の結果、フレンドロートは侯爵の死の直前に、それまでの損害に対し20万マーク（Merk）、徴収不能となった教区十分の一税に対し10万ポンドの支払いを命ずる旨の枢密院命令を入手した。侯爵の死にあたり、フレンドロートは、1636年7月29日には、後継者ゴードン卿が海外にあることを理由に、侯爵の小姓を、更に1637年12月と1638年10月には、第二代ハントリー侯爵を、枢密院命令の速やかな履行を求めて告訴している。

フレンドロートが炎上した時、その事件はバラッドに作られて人々の間に流され、そして人々はそれを自然に受け入れた。彼らは当時の状況を知っており、恐らくはそこに歌われていることが、その火災に対する彼らの大半の見解だったのであろう²¹。彼らは、確信を持ってフ

レンドロートとその夫人を糾弾している。その確信は、フレンドロート夫人がハントリー侯爵の従妹であり、隠れカトリック教徒であるという事実を一瞬のうちに乗り越えてしまうほどに強いものであった。

バラッドに語られているのは、民衆にとっての真実であり、そこに集約されているのは民衆の怒りであった。フレンドロートは、北国に伝統的な美德を踏みにじり、救いの手を差し伸べることもなく客人達を焼死させた—自らが事にあたるのではなく、常に法に訴え、法の威を借りて解決を図るような人間にあり勝ちなことだ。

このような情念を核にバラッドは作られ、殊更に扇情的に、フレンドロートと夫人の悪意と火災の恐怖が誇張された。そこに歌われているのは、現実の事件を民衆の直感が切り取った虚構の世界である。しかし、民衆の直感、理性では測り難いが、時として鋭利な刃物のように鋭く真実を突くことがある。確かに犯人は逮捕され、裁判の上処刑された—自白もなければ決定的な証拠もないままに。

以上、簡単ではあるが伝承のバラッド「フレンドロート炎上」について述べた。17世紀前半に発生したその火災は、当時の謎めいた事件のひとつとして、それをテーマとするバラッドと共に今日に伝えられている。

事件から7年後の1637年10月、容疑者として逮捕され、裁判の結果無罪となったジョン・トッシが、第二代ハントリー侯爵の許を訪ねたという。彼は、事件についてこれまで明かされていない幾つかの事実を侯爵に話し（makisum revelationis）、それに注目した侯爵は、数日間トッシを近くの宿（oistleris）に泊め、毎日12シリングを与えた。侯爵が、トッシから得た情報をどのように利用したか明らかでないが、12月には、フレンドロートが侯爵とトッシを告訴した。そのように、当時のある史書は伝えている²²。

ともあれ、フレンドロートの一件は、出口の見出せぬ迷宮と言える。

[注]

- * "The Fire of Frendraught," William Motherwell (ed.), *Minstrelsy: Ancient and Modern* (Glasgow, 1827), pp. 161-72, 即ち Francis James Child (ed.), *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols. (New York, 1965), rpt. of the 1882-98 ed., IV, 39-49, No. 196 "The Fire of Frendraught" のA aの版を示した。
1. Frendraught の火災の全般に関しては、John Spalding, *Memorials of the Trubles in Scotland and in England, A.D. 1624- A.D. 1645*, Edited by John Stuart, 2 vols. (Aberdeen, 1850-51), I, 9-127 (ANNO 1625 - ANNO 1638); II, 381-411 (Appendix No. I, Burning of the Tower of Frendraught), 419-32 (Appendix No. IV, Broken Men), 432-37 (Appendix No. V, Trial of Dame Katherine Forbes, "Lady Rothiemay"). John Hill Burton, *The History of Scotland*, 2d Ed., 8 vols. and Index vol. (Edinburgh and London, 1873), VI, 205-15. Charles Rampini, "The Burning of Frendraught," *The Scottish Review*, X (1887), 143-63, 参照。尚、上掲のMotherwellやChildも当該のバラッドの掲載にあたり、この事件を詳細に解説している。また、他のバラッド集においても、このバラッド (の版) が掲載された場合、現実の事件に言及し、その詳細な解説を行うのが常である。
2. 当時の歴史家や著作家、聖職者の何人かが、この事件に対する自身の見解を書き残している。上掲Childは、当該のバラッドに付した詳細な解説の中でそれらに言及すると共にその出典を示しているが、Frendraught夫人の伯父でHuntly侯爵の従兄にあたるSir Robert Gordonは、双方の立場を知り得る者として、火災の際にFrendraughtが失った多くの財産や重要な文書・証文からして、彼が自らの屋敷に放火したとは考えられず、Leslie一族とJohn Meldrumが犯人であると推測している。一方、当時の歴史家のJohn Hill Burtonや、これも歴史家で、火災現場からあまり遠くない所に住んでおり、目撃者とも接触可能であった、Gordon一族に属するJohn Spaldingは、犯人の特定は不可能としながらもFrendraughtに対して厳しい見解を示している。また、カトリックの聖職者である Gilbert Blakhal (Father Blakhal)は、宗教的党派心から、Frendraughtが犯人であると断定している (Child, *op. cit.*, IV, 40-42)。後代の研究者であるRampiniは、上掲の論文において、火災は恐らく偶発のものであり、Frendraughtは無実であると判断している (Rampini, *ibid.*, p. 157)。
3. 当時Scotland北東部の社会は、ケルト的伝統に立ち血縁関係を基盤とする氏族制度 (clan system) と、アングロ・ノルマン人によってもたらされ土地の所有関係を基盤とする封建制度 (feudalism) の融合体であり、土地の所有関係が血縁関係によってより強固なものになっていた。Rampini, *ibid.*, p. 145, 及びDavid Buchan, *The Ballad and the Folk* (London and Boston, 1972), pp. 35-47参照。
4. Frendraughtが常に枢密院を頼り、枢密院も常に彼を支持する姿勢を示したのは、カトリック教徒である強大なHuntly侯爵の勢力圏にあって、国教徒であるFrendraughtを温存することで、侯爵への対抗勢力にせんとした、枢密院、延いては国王の思惑があったとされる。上掲のJohn Hill Burtonはこの見解を取り、また、Willie Muir, *Living with Ballads* (Edinburgh, 1965), pp. 78-94を参照。
5. John Meldrumが、1月1日の一件に関する報酬のことでFrendraught と激しく争い、後日彼の所有する馬を盗んだ事実は、Meldrumにとって、後の火災に関する裁判で極めて不利な要因となった。彼に対する起訴状や、彼に関連して提出された書類の中のあるものは、彼のその行為に言及している。Spalding, *op. cit.*, II, 390, 393, を参照。
6. North-country hospitalityに関しては、上掲Rampiniも言及し、その意味で Frendraught 夫人の行動は極めて自然なものであったとしているが (Rampini, *op. cit.*, p. 153), Muirは、それを踏まえた上で、その北部地方の美德を最後まで完遂しなかった夫人の責任は大きく、民衆の怒りもその点に向けられたとしている (Muir, *ibid.*, pp. 86-87, p. 91)。
7. Patrick Shuldham-Shaw and Emily B. Lyle (eds.), *The Greig-Duncan Folk Song Collection*, vol. II (Aberdeen, 1983), pp. 168-69, pp. 539-40.
8. David Herd (ed.), *Ancient and Modern Scottish Songs, Heroic Ballads, &c.*, 2 vols. (Edinburgh, 1776); James Johnson (ed.), *The Scots Musical Museum*, 6 vols. (Edinburgh, 1787-1803); Joseph Ritson (ed.), *Scotish Song*, 2 vols. (London, 1794); John Finlay (ed.), *Scottish Historical and Romantic Ballads*, 2 vols. (Edinburgh, 1808), and Peter Buchan (ed.), *Gleanings of Scotch, English, and Irish scarce old Ballads* (Peterhead, 1825).
9. James Nicolの (記憶に基く) バラッドの全般に関しては、D. Buchan, *op. cit.*, pp. 223-43, pp. 308-9, 並びに拙稿「ウィリアム・マザーウェルの『バラッド集』に見るピーター・バッシュの影」, *CALEDONIA*, 30 (2002) (日本カレドニア学会) 参照。
10. 塔の鍵に関しては、それが投げ込まれたとされる釣瓶井戸が後年浚えられた時、その底から発見されたと地元で伝承されていたが (Finlay, *op. cit.*, I, xxi), 後に否定されている (Child, *op. cit.*, IV, 42)。

11. Sophia Hayは、子爵と結婚する以前に、William Forbes of Tolquhonの長男の Alexander Forbes という恋人があったとされている。Alexanderは、Young Tolquhonと称されており、Sophiaが彼の許を去った時に、彼の嘆きをテーマに“Young Tolquhon”というバラッドが歌われた。Aの版の最後の6連は、そのバラッドを基に作られたか、そのバラッドと混交したのではないかと指摘されている (Child, *op. cit.*, IV, 48-49)。
12. “The Fire of Frendraught”には、キリスト教 (信仰) に関連する詞句が比較的多く見出されるが、本来の伝承のバラッドに関しては、“When bells were rung and mass was sung”が commonplace である以外は (宗教関連の表現は) 不要のものである。Muirは、当該のバラッドが、スコットランドにおいて新教とカトリック教の微妙に対立する時期に作られ、どちらの宗派からもプロパガンダ的に利用された故であるとしている (Muir, *op. cit.*, pp. 90-91)。またMuirは、Calvinismが伝承のバラッドに及ぼした影響を論じている (pp. 177-98)。因に、“vengeance”という語の使用や、それを志向する姿勢も、本来の伝承のバラッドには不要であると思われる。
13. James VIからCharles I 治世下のスコットランド、特にJames VIの時代の政治、経済、及び社会状況の全般に関しては、T.C. Smout, *A History of the Scottish People 1560-1830* (Glasgow, 1969), Part One, The Age of Reformation, 1560-1690 (pp. 49-192)の各項、特に、Chapter II The Reformation, Chapter IV The Revolution in Government, 及び Chapter VI The Country Side IIを参照した。
14. Charles I が事件に介入する以前に、1631年3月11日にはHuntly 侯爵側から、同年4月4日にはFurendraught側から、各々枢密院に、火災事件の審理が速やかに行われるよう嘆願 (書) が提出されている。また、国王の命令が出された後も1633年7月10日には、当時スコットランドを巡幸していた国王の許にHuntly夫人やSophia Hayが出向き、事件の速やかな解決を請願している (Spalding, *op. cit.*, I, 24, 41; II, 383)。国王命令の意図に関しては、Rampini, *op. cit.*, pp. 159-60参照。またRampiniは同頁で、Meldrum に関する国王命令の背後には、Frendraughtの働きかけがあったものと推量している。
15. Toshe の起訴状 (Dittay against Toshe) は、Spalding, *op. cit.*, II, 385-87 に全文が引用されている。
16. Meldrumの起訴状 (Dittay against Meldrum) は、Spalding, *ibid.*, II, 390-92に全文が引用されている。
17. Meldrum の裁判に際して提出された文書のひとつは、Meldrum 自身の証言として、彼が「以前 Frendraughtの屋敷に居住していたことがあり、家内の事情に—Frendraught が普段塔の二階の部屋を寝室にしていたことも含めて—よく通じていた」と記している (Spalding, *ibid.*, II, 396)。
18. Meldrumの裁判に関連して提出された文書の内容の詳細は、Spalding, *ibid.*, II, 390-408 参照。
19. Meldrumは、1630年11月4日に逮捕された後、同年11月30日並びに12月1日に取り調べ (尋問) (examination) を受けた。その際、第一回尋問において彼が証言し、各々証人の証言によって裏付けられた1630年9月30日から10月10日までのアリバイが、第二回尋問において、Meldrum自身の証言が変化したり、John Leslieの従者であるRichert Mowatの証言などとの間に大きな齟齬を生じるような事態に至っている (Spalding, *ibid.*, II, 397-99)。
20. Lady Rothiemayは、屋敷に高地地方の無法者集団が自由に出入りし、そこを根城にするのを放置していたことを理由に、1635年逮捕された。Frendraughtが枢密院から、彼女の逮捕を命じる委任状を (金を遣って?) (purchesis) 入手した故である。彼女は正式に告訴され、1636年8月3日裁判にかけられたが、無法者集団が勝手に屋敷に侵入したものであるとして、自身との関係を否定した。最終的にLady Rothiemayは1637年釈放され、故郷に戻っている (Spalding, *ibid.*, I, 61, 80; II, 432-37)。
21. 当該のバラッドに込められた民衆の心情に関して、上掲Muirは、それがNorth-country hospitalityを踏みにじった者への激しい怒りと、何事も法に訴え自らの手を汚すことのない冷酷な人間に対する反感と嫌悪に根差すものであると述べている。更にMuirは、当時の知識人の一人として、その火災事件をテーマに2編のラテン語の詩を書いたAberdeenのArthur Johnsonも、一方の詩で、民衆の怒りとは別の観点から激しくFrendraughtを糾弾していると付言している (Muir, *op. cit.*, pp. 84-87)。また、当該のバラッドを口承から収集した上掲のGreigも、当時の状況を知っており、それをバラッドに歌った民衆が、その事件に抱いていた信念 (traditional and popular belief) は、軽視されるべきではないとしている (Shuldham-Shaw & Lyle, *op. cit.*, pp. 539-40)。
22. Spalding, *op. cit.*, I, 82-83。